

審査の結果の要旨

氏名 鄭 穎

論文題目 生活領域の多層性に関する研究

本論文は、日本・中国の高密度住宅地を対象とした調査により、生活領域の構造を解明しようとするものである。ここで生活領域とは、日常生活と関わる住まいの周囲に広がる空間であり、「居住者の生活が行われることによって、戸外空間を自分たちのものという意識をもつ空間領域」と定義される。

本論文は、居住者の戸外空間の利用、戸外行為、近所付き合い、また近所に対する認識など、日常生活に関わる多くの角度から生活領域の各面を考察し、「地域に住む」住宅像のあり方について示唆を得ることを目的とする。近年、地域共同体意識は次第に薄れていく傾向にあることが背景となっている。

本論文は、5章からなっている。

序論では、関連する既往研究として、心理学のテリトリー研究と建築学の生活領域研究を概観した上、本研究の特色を述べた。

第2章では、研究対象とする調査地区である北京の新・旧四合院住宅と東京の谷中地区と調査概要について述べた。

第3章「専有化領域・住戸まわり空間」では、「セミプライベート空間」ともいわれ、住宅と接する住戸まわり空間領域を考察した。この空間では私的専有、占用行為が展開され、私的領域が形成され、その発生、原因、形成された領域の性格、その領域と共用領域形成との関係を明らかにした。

モノによる空間の専有行為と滞在行為による占用行為が玄関まわり空間を中心となる住戸まわり空間で私的専有化領域を形成させる。それにより、他人が侵入しにくい領域、テリトリーを作り上げ、安心感と帰属感が得られ、専有化領域が住戸内空間を共的、公的都市空間とつなげる役割を果たす重要な空間であることが明らかになった。

第4章「近所領域」では、「セミパブリック空間」ともいわれる近隣生活空間について考察した。外出時に住宅裏口の使用による「ウラの領域」、普段着の行動範囲による「普段着の領域」、近所顔見知りからなる「顔見知りの領域」と近所と認知される「近所認知領域」のそれぞれの領域を究明し、具体例を通じてこれらの領域を重ね合わせ、「近所領域」の階層、空間性格を解明した。

ほとんどの住戸にとっての「ウラの領域」が向こう三軒両隣や路地範囲までであるが、一方積極的な使われ方も見られ、裏口の必要性が高いことを明らかにした。

「普段着の領域」は徒歩、自転車交通圏、または生活圏とほぼ一致し、日常生活のよく利用する場所から形成され、かつ地域の他の居住者との日常的な関わりの多少に影響されることを示した。公的都市空間でありながら居住者にとって心理的には私的領域が普段着の領域といえ、調査地区の居住者の広い普段着の領域が住まい地域に対する強い帰属感や安心感のある証であるとした。

「顔見知り領域」は近所付き合い状況の現れであり、向こう三軒両隣や路地に高密度に分布すること、玄関に面する道路沿いに分布すること、表から表への広がり方をもつこと、町会

域に大きく影響されることが全住戸に共通である。きっかけが多ければ顔見知りも多くなり、顔見知りの形成は住まい同士の位置関係と関係し、玄関が同じ道に面すると顔見知りになる確率が高い。調査地区では、居住単位となる路地や街区のスケールが顔見知りとなれるほどよいスケールであるとした。

「認識領域」は、ほとんどの居住者にとって、近所だと思われる範囲は日常生活でとくに頻繁に利用する範囲であることを明らかにした。顔見知りのいる町会側ではなく、日常の買い物などでよく利用する反対側を近所と認知する例に示される。

近所領域がこういった「ウラの領域」、「普段着の領域」、「顔見知りの領域」と「認知領域」の多層構造をなし、且つ「普段着の領域」と「顔見知りの領域」は明確な重層構造となる。全住戸は住宅周囲の居住単位、道路、町会などの環境に影響されながら、それぞれの日常生活行為によって近所領域を形成する。これらの領域は相互に影響しながら独立する。住まいの周囲や地域への日常外出行為が非常に活発な住戸は、全ての領域において広い。その反対となる住戸は、普段着の領域が路地までと小さく、顔見知り範囲も路地に限られる。認識される近所領域は巨大化する傾向がある。

第5章では、以上の考察をまとめ、今後の都市高密度住宅のあり方について示唆した。

生活領域に居住者と地域との繋がりが反映され、日常生活は生活領域の各面に影響を及ぼす。

まちの構造、尺度、近所の日常施設の充実、町会など近隣交流を促進する様々なきっかけによって、このような多層性のもつ生活領域が生まれる。この豊かな生活領域の様相が居住者の住む地域に対する帰属感と安心感のあらわれと、「地域に住む」住まいの象徴と考えた。

以上のように本論文は、日中の高密度住宅地の調査により、生活領域の多層的な構造を明らかにした。住まいと都市空間の間にある中間領域は、専有化領域と近所領域からなり、さらに近所領域がウラの領域、普段着の領域、顔見知りの領域と認知領域からなる。これらの領域は全て日常生活と関連するが、それぞれは独立し、異なる性格と意味をもち、多層構造で生活領域を形成することを明らかにした。

この豊かな生活領域の様相が居住者の地域に対する帰属感や安心感をもたらす可能性となるものであり、今後の都市高密度住宅のあり方を考える一つの提示となり、建築計画学の発展に大いなる寄与を行うものである。

よって本論文は博士(工学)の学位請求論文として合格と認められる。